

道徳科の特質

答えが一つではない道徳的な課題を、一人一人の児童が自分自身の問題として捉え、向き合う「考え・議論する道徳」への転換を図

道徳的諸価値の理解

道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるもの。

価値理解 道徳的価値のよさ、素晴らしさ

人間としてよりよく生きる上で大切なことである。

→「友情って大切だな」「仲良くすると本当に楽しいなあ。」



人間理解 道徳的価値の実現の難しさ

大切であると分かっている、なかなか実現することができない人間の弱さ、脆さ。

→「友情が大切とは分かっている、みんなと仲良くするのは難しいなあ。」

他者理解 道徳的価値観の多様さ

道徳的価値を実現したり、できなかったりする場合の考え方、感じ方は多様である。

→「友情についても、人によって考え方や感じ方はいろいろ違うのだから。」

自己を見つめる

これまでの自分の経験やそのときの考え方、感じ方と照らし合わせながら、更に考えを深める。

自己理解

自分とのかかわりで道徳的価値を捉え、自己理解を深める。

→「今まで友だちと仲よくして、助け合っていたかなあ。」

多面的・多角的に考える

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、児童が多様な考え方や感じ方に接する。

対話的な議論

物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解に基づき考え、様々な視点から物事を見つめて、主体的に話し合う。

→「あの時、友だちはどうして手伝ってくれたのだろう。」

自己の生き方についての考えを深める

自己の生き方と照らし合わせて考える。

道徳的価値の主体的な自覚

道徳的価値を自分との関わりで深めたり、自分や他者の経験や感じ方・考え方と重ねながら、道徳的価値について自分の考えを発展させていく。

→「自分の言葉が友達を傷つけているかもしれない。相手の立場に立って考えたいなあ。」

授業のポイント

授業のねらいの吟味

指導観（本時の主題）を明確にすることが最も重要です。

～ 1時間の授業で期待する児童の姿 ～

価値観

ねらいとする道徳的価値について、学習指導要領に基づき、明確な考えをもつ。

児童観

ねらいとする道徳的価値について、児童の状況を捉え、育てたい子供像を明確にする。

教材観

ねらいとする道徳的価値がどのように含まれていて、活用するのかを明らかにする。

学習指導過程

登場人物への自我関与

登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることを通して、自己の生き方について考えを深める。

発問構成の工夫

児童がどのように学び合うかを具体的に予想し、それが効果的になされるための授業全体の発問を構想する。

導入

道徳的価値に関する内容の提示

- 主題に関わる問題意識を喚起させる導入
… 事前アンケート → 授業後に比較できる
- 教材の内容に興味や関心を持たせる導入
… 掲示物の工夫や教師の発問

例1：教材の場面に即した発問構成

「うばわれた自由」
高学年

授業前の自分の考えを短冊に書く



時系列的な発問構成

展開

「ゆっきとやっち」低学年

自分との関わりで考える

やっちから自慢されたとき、ゆっきはどんな気持ちだったでしょうか。

心の葛藤を多面的に考える

「僕のことはいいから先に行けよ」と言われて、ゆっきは迷いながらどんなことを考えましたか。

価値について理解を深める

ゆっきとやちはどんなことを思いながら飛んでいたのでしょうか。

主人公の心情や考えを明らかにする発問

〔共感的〕

主人公の気持ちを問う

～はどんな気持ちだろう。
～はどんなことを考えているか。

〔分析的〕

その原因や理由を問う

～したのはなぜだろう。
～から何が分かるか。

主人公に自分を重ねる発問

自覚

〔投影的〕

主人公に自己投影して問う

自分が～ならばどう考えるか。
(×自分だったらどうするか。)

主人公を客観的に見る発問

〔批判的〕

比較検討

物語や主人公の考えを問う

～のことをどう思うか。
～は本当にそうしてよいのか。

自分自身の気持ちや考えをもち、意識する発問

開

例2：問題解決的な発問構成

様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

- ・～には、どんな意味があるのか。
- ・～が大切にしていることは何だろう。
- ・～はどんなことが問題なのか。

「うばわれた自由」高学年

王子とガリユールの自由に対する考え方を対比



例3：体験を通じた発問構成

体験的な行為や活動を通して、実感的に道徳的価値について考えを深める。

- ・役割演技：即興的に演技する。
- ・疑似体験：実際にはできない体験を…。
- ・追体験：道徳的行為を想起する。

「いのちの授業」
中学年

ハートの紙に自分の名前を書いてクシャクシャに…



終末

今後の発展につなぐ段階

※ 自分自身の変容に気付かせる。自律を促す。

- ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめる。… ワークシート
- 道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認する。… 教師の説話

評価の工夫

評価の基本的な考え方

数値による評価ではなく、
学習状況及び道徳性に係る成長の様子を中心に把握し、指導に生かす。

評価の方向性

児童が自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていく評価

- ・ 数値による評価ではなく、記述式とすること。
- ・ 個々の内容項目ごとの評価ではなく、大きくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
- ・ 他の児童生徒との比較ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと。
- ・ 学習活動において児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
- ・ 道徳科の学習活動における児童の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること。

評価の具体例

一人一人の学習状況や道徳性に係る成長の様子について、学習状況を把握した上で、特に顕著と認められる具体的な状況を記述する。

終

展

開

導

「絵はがきと切手」

④ 自己の生き方について考えを深めている様子を見取る。



③ 多面的・多角的に考える状況や様子を見取る。

② 自己を見つめる状況や様子を見取る。



① 道徳的価値の理解の状況や様子を見取る。



視点1「自分を見つめ、自分のこととして考えているか」

○ 友達のことを意識し（相手意識）、友達のために自分が～したいという気持ちが大切だと思えるようになり、成長を感じました。

視点2「物事を多面的・多角的に考えようとしているか」

○ 友達の意見を聞き、自分の考えと比較して、「自分がひろ子さんだったら、友達だからこそ教えた」と考えを深めていました。



教材の工夫

主として教科書を使用しますが、多様な教材を併せて活用することが大切です。その際、「児童の発達の段階に即したもの」「人間尊重の精神にかなうもの」「特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないもの」であるなど法令に従い、適切に判断する必要があります。例えば、文部科学省「私たちの道徳」、東京都「道徳教育教材集」の他、「地域教材」「副読本」「絵本」「詩」「映像教材」「地域資料」「新聞」など、授業のねらいにそって活用します。

「別葉」の作成

〈別葉のポイント〉

- 学校の道徳教育の重点目標を設定する。
- 重点となる内容項目を明らかにする。
- 教育活動全体で実践する指導の内容と時期を明確にする。

各教科等における道徳教育にかかわる指導の内容及び時期を整理した「別葉」を作成し、学校の教育活動全体を通して道徳教育を進めていく。

3年生の例		6月	6月
道徳	「友だち屋」 B 友誼、信頼 「電話のかけ方」 B 礼儀 「千のこころ」 A 正義、誠実	「読者の心をつかむ」 C 多読 「心の豊かさ」 C 規範の尊重 「はた・らく」 C 勤勉	「ドンマイ！ドンマイ！」 B 相互理解、寛容 「いただきます」 D 生命の尊厳 「お日さまの心」 C 公正、公平
学活	○ 学習意欲を高める ○ 結合の仕方を知る ○ あいさつの大切さ	○ 学習目標を話し合う ○ 係を決める ○ 満足に向けて	○ 雨の日の過ごし方 ○ 図書室の利用 ○ 人権について考える
行事	○ 給食 ○ 一年生をむかえる会 ○ 交通安全教室	○ セーファティ教室 ○ おべんとうの日	○ 移動教室
各教科	○ 社会 「学校のまわり」 A 前向き、前向き ○ 体育 「体はくしの運動」 C 規範の尊重	国語 「よい聞き手になる」 B 読解、思いやり 理科 「くみまを育てよう」 D 生命の尊厳	○ 国語 「きせつの言葉」 C 伝統と文化の尊重 ○ 社会 「市の様子」 D 自然環境

小教研「道徳研究部」報告書より 抜粋

4 道徳の教科化に向けて

(1) 平成30年度全面実施の「特別の教科 道徳」に求められているもの

大きく分けて ①量的確保 と ②質的転換 が求められている

量的確保・・・年間35時間きちんと実施すること。

質的転換・・・登場人物の心情理解に終始せず、指導方法を工夫し、よりよい授業を目指すこと。
具体的には、

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| ①検定教科書を導入 | ②内容項目をいじめ問題への対応の充実等を踏まえた体系的なものにする |
| ③問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れた指導方法を工夫 | ④記述式評価 |

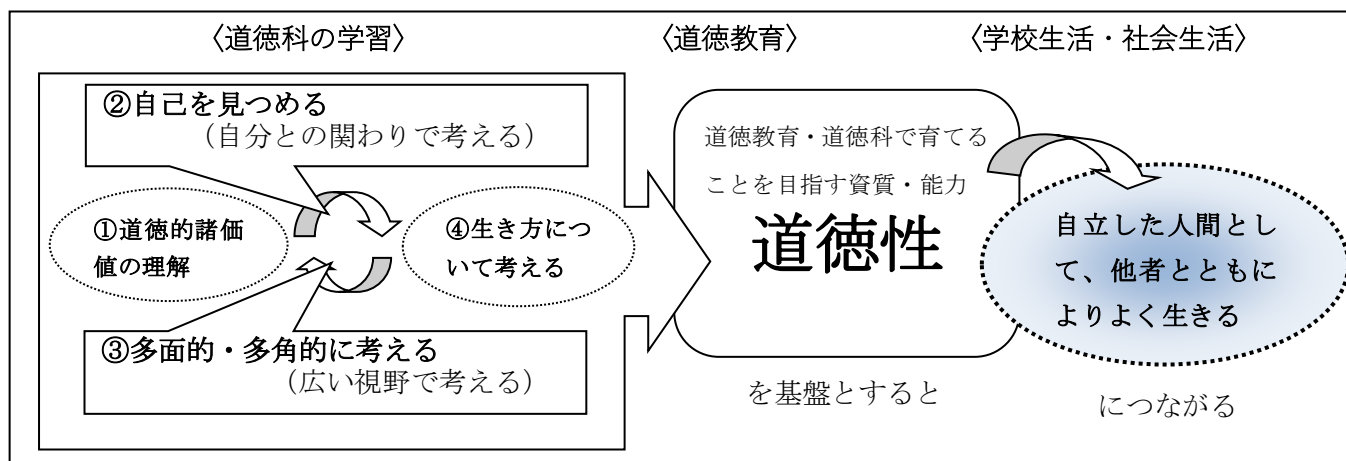
→「答えが一つではない課題に児童が道徳的に向き合い、考え議論する」道徳への転換を目指す。

(2) 道徳科の学習は、具体的には何を学ぶのか

道徳科の目標は、「道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とある。つまり、道徳科の特質は、

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| ① 道徳的諸価値の理解を基に | ② 自己を見つめる |
| ③ 多面的・多角的に考える | ④ 自己の生き方についての考えを深める |

ことの4点であり、以下の構造図のように捉えることができる。



【図1】参考：「道徳教育の抜本的充実に向けて」 文科省初等中等教育局教育課程課主任学校教育官 小野賢志 氏

(3) 考え、議論する道徳は、どの部分の充実を図ろうとしているか

「考え」という部分は、②の「自己を見つめる」学習活動にあたる。具体的には、登場人物の心情や解決すべき問題を自分のこととして、自分との関わりで考える活動のこと。これまで研究してきた教材提示を大切にし、登場人物に児童をなりきらせることも、考える道徳の一つということである。

「議論する」という部分は、③の「多面的・多角的に考える」学習活動にあたる。具体的には、多様な意見を受け止め、広い視野で考える活動のこと。議論するというのは、ディベートするという意味ではなく、多様な他者の意見を受け、自分なりの納得解を得るということである。

5 道徳Q & A ～今年度の実践事例を通して～

Q1 教科書以外の教材は活用できないのでしょうか？

A1 主たる教材として教科用図書として使用しなければならないことは言うまでもないが、道徳教育を鑑み、多様な教材を併せて活用することが重要である。教材については、「児童の発達の段階に即したもの」「人間尊重の精神にかなうもの」「特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないもの」であることなど、教育基本法や学校教育法その他の法令に従い、適切と判断されるものである必要がある。
例えば、文部科学省「私たちの道徳」、東京都「道徳教育教材集」のほか、「地域教材」「副読本」「絵本」「詩」「映像教材」「地域資料」「新聞」など多様なものが考えられる。

Q2 教材提示にはどのような工夫があるのでしょうか？

A2 自作した大型絵本を活用したり、BGMや映像資料を使用したりして、情感を込めた読み聞かせを行うことで児童を教材の世界に浸らせるような工夫が考えられる。

Q3 道徳科の目標にある「道徳的諸価値の理解」とは何ですか？

A3 道徳的価値の理解は、内容項目のことだけではない。以下の→「 」内は、友情についての例。
(1) 価値理解 … 人間としてよりよく生きる上で大切なことであることを理解すること
→「友情って大切だな」
(2) 人間理解 … 大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること
→「友情が大切とは分かっているけどなかなか難しいな」
(3) 他者理解 … 道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の考え方、感じ方は多様であることを理解すること
→「友情についても人によって感じ方は違うのだな」

上記のように道徳的価値が人間らしさを表すものであることに気付き、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深めていくことが大切である。

Q4 自分との関わりで考えるためには、どのような授業展開がよいのでしょうか？

(導入)

A4 授業実践では、導入において事前に行ったアンケートの結果を示したことで、子供が本時の学習の方向性をつかむことができた。また、アンケートは児童理解に生かすことができる。初めに結果を紙に書いたものを提示しておき、自己の振り返りでじっくり考える材料にもできる。

(展開)

A4 一問一答の授業展開にならないように、教材分析や児童理解を基にした問い返しや補助発問を行うことが効果的である。「発表をし合う」から「話し合う」方向に高めていく必要がある。

Q5 自己の生き方を考えるってどのような活動のことですか？

A5 児童が「価値の主體的な自覚」をし、自己の生き方と照らし合わせて考える活動のこと。展開の前半で、教材を通して登場人物に自分の生き方を重ね合わせて考え、後半で自己のこれまでの生き方を振り返る活動が有効である。

Q6 どのようにすれば自己の生き方についての考えを深めることができますか？

A6 導入・展開・終末に一貫性をもたせ、主題を貫くことが大切である。また、児童が友達の多様な考え方を受け止め、自分の生き方と比較することで、自己の生き方を振り返り、より望ましい生き方に自らが気付けるようにする。このようにすることで一人一人の児童がよりよい生き方に近づくことにつながる。

Q7 道徳の評価はどうやって行えばよいのですか？

A7 道徳科の評価は、児童が自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくことが基本である。道徳科の特質を踏まえれば、以下のことが大切である。

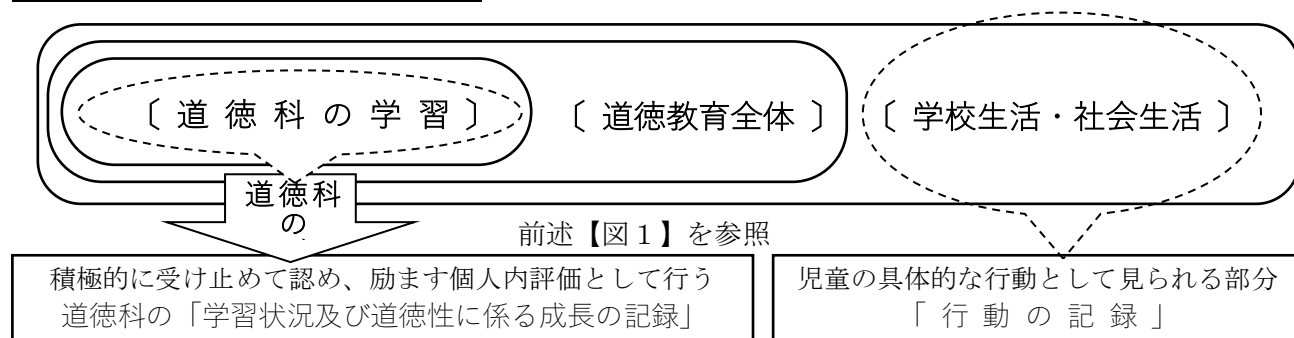
- ・ 数値による評価ではなく、記述式とすること。
- ・ 個々の内容項目の評価ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
- ・ 他の児童生徒との比較ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行うこと。
- ・ 学習活動において児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。

Q8 具体的にどの場面で評価すればよいのですか？

A8 道徳性が養われたか否かは容易に判断することができない。したがって、児童一人一人の学習状況や道徳性に係る成長の様子について、特に、

- ① 「自分を見つめ、自分のこととして考えているか」
- ② 「物事を多面的・多角的に考えようとしているか」

といったところに着目し、**道徳科の学習状況を把握する**ことが必要である。その上で、特に顕著と認められる具体的な状況を記述することが妥当である。



Q9 評価の例文があると助かるのですが…

A9 道徳部では、このような例文が参考になるのではないかと考えた。

- ・〇〇の学習を通して、△△の大切さを自分との関わりで改めて実感し、□□していこう、という思いを強くしました。
- ・〇〇の学習を通して、友達の多様な考えを受け止めて、△△も大切だと思うようになりました。

さらに具体的にすると・・・

- ① 生命の学習を通して、祖先から受け継がれてきた生命のかけがえのなさについて自分との関わりで実感することができました。(自分との関わりで考える観点から)
- ② 正直誠実についての学習では、友達の意見を受け止めて、正直に過ごすことのよさと共に、正直に行動することの難しさに気付くことができました。(多面的・多角的に考える観点から)

5 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・児童の実態やねらいに合った児童の心を揺さぶる“よい”教材を選ぶことで、児童を教材の世界に浸らせ、自分との関わりで考えさせることができた。
- ・グループ内での話し合いやペアトーク、動作化など多様な話し合いの手立てを工夫し、ねらいに即した明確な発問を行うことで、児童が主体的に話し合うことができた。
- ・「主題を貫く」ことを意識して授業を行うことで、導入から終末まで、児童がねらいに沿って考えることができた。

(2) 課題

- ・話し合いの手立ては多様にある。これからも実践を通して、その方法を追究していく。
- ・道徳授業でふれた内容項目について、別業との関わりを意識して、教育活動全体で指導をしていく必要がある。
- ・道徳授業における評価の観点や見取り方をさらに明確化し、児童の成長を見取ることができるようにしていく。